飢餓対策 NEWS　第 246 号　発行日 2010 年 12 月 20 日（毎月 20 日発行）定価 15 円

日本国際飢餓対策機構（Japan International Food for the Hungry：略して JIFH）は、イエス・キリストの精神に基づいて活動する非営利の民間海外協力団体 (NGO) です。1981 年にひとりの日本人がインドシナ難民救援に参加したことを契機として誕生しました。以来、世界の貧困・飢餓問題の解決のために、自立開発協力、教育支援、緊急援助、人財育成、海外スタッフ派遣、飢餓啓発などに活動を広げてきました。現在は、国際飢餓対策機構連合（Food for the Hungry International Federation）の一員として、18 ヶ国 55 の協力団体とともに、アジア、アフリカ、中南米の開発途上国で、現地パートナーと協力しあって、「こころとからだの飢餓」に応える働きをしています。

本年もどうぞよろしくお願いいたします

明けましておめでとうございます。昨年も世界で貧困と飢餓に苦しむ方々のために温かいご支援とお祈りを感謝いたします。また各事務所でボランティア参加、世界食料デーや地道な草の根運動を継続して下った支援者の皆様に、職員一同、心より感謝を申し上げます。各事務所ではいつでも皆様のご来訪をお待ちしております。支援方法のお問い合わせや講演依頼、チャリティ企画のご提案などお気軽にお問い合わせください。

JIFH 30周年記念企画

当機構は本年、発足より 30 年を迎えます。これを励みとして、飢餓対策を推進していくために、5 月に「ハンガーゼロ・チャリティコンサート」を東京、大阪、愛知、広島、沖縄で開催いたします。特別ゲストに韓国から 4 本指のピアニストとして世界的に知られるイ・ヒアさんが出演予定です。

韓国のフルート演奏者が応援

2 月関西地区で韓国人女性 5 人のフルートクワイヤーのチャリティーコンサートを開催します。詳しくは web で。

年末年始も 本 de リンク！

～眠っている古本や CD で国際協力～
愛知事務所まで御連絡ください。
（11 月報告　本：428 冊、CD：12 枚）

訂正

本紙前号第 245 号と同送しました「年次報告」中で、当機構評議員の氏名、笹川徹三は「**笠川徹三**」の誤りです。お詫びとともに訂正いたします。

ハンガー・ゼロ・サポーター大募集中！

今すぐ▶▶▶ 各種支援のお申し込みができます!!

●まず右の必要事項に記入して、点線の枠部分を切り取りハガキに貼って、下記の大阪事務所宛に郵送、又はこの頁をコピーして、ファクシミリで申し込みください。確認のための必要書類等を送らせていただきます。
お電話でも申し込みできます。各事務所までおかけ下さい。

- □ ハンガー・ゼロ・サポーターとして協力します。
  毎月（　　）口、協力します。（1 口 1,000 円）
- □ JIFH 会員になり毎月定期的に財的協力をします。
  毎月（　　）口、協力します。（1 口 500 円）
- □ 「世界里親会」に協力します。
  説明書、里親会入会申込書を送ってください。
- □ 海外派遣スタッフを支援します。
  毎月（　　）円（　　）スタッフ指定
- □ 海外派遣スタッフを支える会の会員になり、
  協力します。毎月（　　）口（1 口 1,000 円）
- □ 郵便自動引落の申込書を送って下さい。

フリガナ
氏名：　　男・女

〒
フリガナ
住所：

（電話）

▼申込日：　　年　月　日▼

FAX・072-920-2155

ハンガーゼロ・サポーターのお申し込み拡大中です。運動への参加を感謝いたします。

中高生がチャリティーライブ企画

昨年の11月27日、大阪府八尾市のグレース宣教会ユースネーション(中高生が集う教会)においてハンガーゼロアフリカ・チャリティーライブが開催されました。

このライブは当機構スタッフの報告を聞いた学生の発案で、同教会の中高生により行われたものです。当日は他府県からも含めて100名以上が来場、４つの中高生バンドの熱演もあり会場は熱気に包まれていました。その中でスタッフによる世界の飢餓の問題、アフリカのニジェールの現状の報告が行われました。会場での募金やサポーターに申し込む学生もいました。ぜひ支援者の皆様も、様々な形でハンガーゼロ応援イベントを企画してみてください。

★ご協力を感謝します★皆様に飢餓対策ニュースをお届けするために、毎月、ひばり障害者作業所（八尾市）、生活愛（大阪市など）、そして関西一円のボランティアの皆様が発送作業のご協力をして下さっています。ありがとうございます！

■発行者　岩橋竜介
■発行所　一般財団法人　日本国際飢餓対策機構
Web サイトアドレス　http://www.jifh.org/
e メールアドレス　general@jifh.org
■郵便振替　00170-9-68590 ／日本国際飢餓対策機構
※支援金は随時受け付けております。

大阪　〒581-0032 八尾市弓削町 3-74-1
TEL (072)920-2225　FAX (072)920-2155
東京　〒101-0062 千代田区神田駿河台2-1 OCC ビル 517 号室
TEL (03)3518-0781　FAX (03)3518-0782
愛知　〒466-0064 名古屋市昭和区鶴舞 3-8-10 愛知労働文化センター 2F
TEL (052)731-8111　FAX (052)731-8114
広島　〒731-0103 広島市安佐南区緑井 2-21-23 201 号
TEL (082)831-1214　FAX (082)877-3961
沖縄　〒901-0156 那覇市田原 3-8-1 ユリ香ハウス 201 号
TEL (098)859-4585　FAX (098)859-4540

携帯サイト

日本国際飢餓対策機構
2011 No.246　1

飢餓対策 News

やや大きな島国の役割

新年明けましておめでとうございます。昨年ＪＩＦＨは主の導きと多くの方々の支えの中で、更なる活動の拡大と社会的な公益性を目指して、一般財団法人としてスタートしました。皆様の尊い愛のささげものとお祈りによるご支援、さらには具体的なご指導をいただき、心から感謝します。それらによって、世界の物心両面の飢餓に苦しむ人々が何人救われてきたことでしょうか。

世界の飢餓人口は今なお約９億人を数えています。そのような中で日本のような豊かな国に住む人々が、ほんの少しだけでも他の人のことを考え、たとえ小さな力やお金でも分かち合うことができたら、この世界はどんなに豊かになることでしょうか。物質的な面だけでなく、心も豊かにされることでしょう。

先日、眞淳平著「世界の国１位と最下位」という本を読んでいて、意外なことを知りました。私たちはよく「小さな島国の日本」という表現をしますが、実は約200ある独立国の中で、日本は上から60番目ぐらいに位置している「やや大きな島国」なのです。さらに、排他的経済水域まで含めると、6番目の大きさがあるのです。「小さな島国」という時に、こんな小さな国の私たちには何もできません、というニュアンスも含まれているように感じます。しかし、やや大きな島国であり、6番目の広さを誇る事実を考えると、もはやその言い訳も通用しません。実際に私たちの生活は豊かです。聖書にこう書かれています。『あなたの兄弟のひとりが、もし貧しかったなら、その貧しい兄弟に対して、あなたの心を閉じてはならない。また手を閉じてはならない。必ず彼に与えなさい。また与えるとき、心に未練を持ってはならない。このことのために、あなたの神、主は、あなたのすべての働きと手のわざを祝福してくださる。』

分かち合うことこそ、苦しむ人々を助ける道であり、実はそれが私たち分かち合う者も祝福される道なのです。9億という人の数は途方もない数です。しかし、それでもまず始めなければなりません。一人、そしてまた一人と分かち合う時に必ず世界が本当に豊かにされる時が来ると信じます。どうぞ、今年もその一人としてＪＩＦＨの働きを支えてください。皆様お一人お一人の上に神様の豊かな祝福をお祈りします。

日本国際飢餓対策機構　理事長　岩橋竜介

1 分間に 17 人（うち 12 人が子ども）・1 日に 2 万 5 千人・1 年間では約 1,000 万人が、飢えのために生命を失っています。

マラリア対策で配布した蚊帳を受け取りに集まった住民

2010年夏、当機構ではハンガー・ゼロ・アフリカのサポーターのご協力によって、ニジェールの人々のために、穀物、粉ミルクとビタミン剤、蚊帳などを支援することができました。これらの支援は当機構の現地でのパートナー団体、英国のバルナバス・ファンドを通しておこなわれました。副代表マーク・グリーン氏からのレポートを掲載します。

写真㊨にバルナバスFのマーク・グリーン氏、同㊧は岩橋理事長。中央は現地協力者のジャック氏。

からだとこころで感じる支援です

飢餓に苦しむ人々のために、愛の支援を続ける日本国際飢餓対策機構のパートナーとして、共に働くことができることを感謝します。サポーターの皆様に、ニジェールの現状をお知らせします。

困難の中にはありますが、ニジェールは美しい国です。そして人々は非常に友好的です。

首都のニアメから隣国チャドへの数百キロの細長い地域に主だった町があり、人口の多くがこの地域に集まっています。ここは砂漠に近い気候で河川がなく、干ばつによる被害が特に大きい地域です。経済活動といえば、大きい企業がいくつかある以外は、市場の小さな店や路上での売り買いがほとんどです。仕事があれば１日２ドル（約170円）、事務職や政府の役人、ホテルなどで、1日３ドルあるいは１ヶ月60〜75ドルの収入が現状です。

降雨ゼロから一転、豪雨被害

私たちが支援を行っている地域の一つで、2010年９月にJIFHのスタッフに訪問して頂いたGB村は、住民1,500人。この５、６年の飢饉によって個人で蓄えていた食べ物や村の在庫が底をつき、人々は食べ物を買うために、持っている物を売り、大切な家畜を食べて生きのびてきました。７月から９月に降る雨を頼りに、10月に収穫した穀物で１年間食いつなぐ農業を行っています。しかし今期は雨季に雨がなく、遅れて降った雨が豪雨で洪水になったため、現在は初めから何も無い状況です。従って支援が命綱となっています。

マラリアという問題もあります。JIFHから防虫剤の入った繊維で作られた蚊帳（オリセットネット）が贈られ、子どもたちを守る努力が行われています。

教育に関しては、公立の学校が一つありますが、７才から14才の子ども200人以上に対して３クラス３人の先生という状態です。

バルナバス・ファンドは、ハンガー・ゼロ・アフリカのサポーターと協力して、多くの問題を抱えているこの地域の人々の自立支援を進めてまいります。ニジェールの人々が、支援を通して国外の多くの方々の愛と祈りを感じることができるのは大きな幸いです。

●ハンガー・ゼロ・サポーターのお申し込みは、専用ウエブサイト http://www.jifh.org/hungerzero/ からもできます
ハンガーゼロをあなたのお知り合いにも！「ハンガーゼロ・プラスワンセット」各事務所までお求めください。（無料）

… 兵士 …

アフリカで出会った人々

ルワンダ駐在スタッフ　竹内　緑

私がアフリカへ派遣されたのは、1993年８月でした。以来今日まで、アフリカ大陸の７ヶ国の国々と関わって参りました。この間、考えさせられることが幾つかありましたが、今回はその一つをお知らせいたします。

日本とアフリカとの大きな違いの一つは、治安と言えるでしょう。世界有数の安全な国・日本から、現在も紛争の絶えないアフリカの国々へ遣わされて驚いたことは、日常的に銃を見ることでした。同時に兵士、特に国連軍との交流が生まれたのは、これまでに無い経験でした。

1993年、私が派遣されたソマリアでは、国籍の異なる数人のスタッフたちが同じ建物の中で起居を共にしていました。そこから数十メートル離れた所に診療所を運営し、私は、村々へ車で出向いて治療する移動診療チームの一員として働いていました。

当時、私が所属していた国際飢餓対策機構（ＦＨＩ）は、スタッフの身の安全と車や薬品など資財を守るため民兵を採用していました。ソマリア人民兵たちは、24時間警護に当たっていましたが、民兵を採用していたのは、ＦＨＩだけでなく、他のNGO(非営利民間援助団体)や国連機関も同様でした。

ある日、私たちの住居であり事務所でもあった建物に８人のソマリア人たちが発砲しました。私たちの民兵たちも反撃し十数分間の銃撃戦になりました。やがて、銃口を向けたソマリア人たちは退去しましたが、その数時間後、10人余りの国連の兵士がやって来ました。彼らは約2週間駐留し、私たちと同じ建物の中で寝食を共にしました。その時の司令官がキューバ人で、彼は日本に駐屯したこともあり親日家でした。

翌朝、彼は何を思ったのか、身の上話をとつとつと私に語るのでした。その途中、事件の調査報告のため独り駐屯地へ戻る彼を迎えにヘリコプターがやって来ました。急いで身支度を整えた彼は、防弾チョッキを着て、長短2種類の銃を持ち、ヘルメットを脇に抱えトランシーバーを手に、上空を旋回しているヘリコプターと交信しながら、ゆっくりとヘリポートへ歩いて行きました。

「また会いましょう‥」と微笑みながら手を振って機内へ入る彼は独身でしたが、恋人か妻がここに居たなら彼の姿はどのように映ったのだろう。轟音と粉塵を舞い上げて飛び立ったヘリコプターを見送りながら、「銃の用途は‥、戦争と平和は‥」など、単純で複雑な疑問が私の頭を交錯するのでした。

（竹内緑の連載は今回で終了）

竹内　緑
1993年以来、ソマリア、旧ザイール、アンゴラ、エチオピアで緊急支援に従事。2006年9月からルワンダのカモニ郡でトラウマ被害者支援に取り組む。

はじめに

20世紀は地球規模で大きい変革の世紀でありました。人口の増加（15億から60億人へ）、文明の進化（貧富格差の拡大、食料危機・飢餓対策）、戦争による大量殺戮（２度の世界規模戦争による１億人の犠牲者）などであります。
その中で1994年４月、中央アフリカの小さな国ルワンダで起きたジェノサイド(大量殺戮）では、僅か100日間で80万人が犠牲者となり、世界中の人々を震撼させるものとなりました。

虐殺被害者のサベリアナさん㊧と加害者のタデオさんが並んで当時の模様を証言

RWANDA

憎悪から和解への「癒しへの旅」

視察報告

麦　野　　賦（みつぎ）
伊集院キリスト教会協力牧師
伊集院幼稚園長

ツアー参加者とともに、後列右から2人目に麦野さん

小生は、ＪＩＦＨ（日本国際飢餓対策機構）の呼びかけによる「教職者視察研修」(10月28日から11月6日)に、事実確認と新たな人類の平和構築へ期待を込めて参加しました。鹿児島からルワンダ国首都のキガリまで40時間の長い飛行機の旅でした。

ルワンダの悲劇

ルワンダには、「千の丘の国」という表現がぴったりの平和でのどかな風景がありました。1994年4月6日にフツ族出身の大統領の飛行機が撃墜されたことがきっかけで、ツチ族への無差別殺戮事件へと発展しました。19世紀にドイツ、20世紀にベルギーによる植民地支配がこのような悲劇を生み出すもとになったと聞きました。電気も水道もなくバナナ園栽培や家畜の育成で生活する村人たちの間に突然襲ってきた無差別殺戮行為です。

ニヤマタの集落では、安全を見越して避難していたカトリック聖堂に民兵たちは手榴弾を投げこみ、なたで皆殺しを図り1万人が犠牲になりました。虐殺記念館として保存されている元聖堂の壁には、乳幼児を叩きつけた跡が黒々とあり思わず目を背けてしまいました。

国連などの介入によって無差別殺戮行為は一応収集しましたが、前代未聞の驚くべき事件のゆえに政府の力では解決できない状態が数年間続いたとのことです。そのときにNGO（民間団体）であるREACH(Reconciliation Evangelism And Christian Healing for Rwanda・「ルワンダの人々の癒しと和解」)の働きが始まりました。難民経験者でルワンダ人聖職者フイルバート・カリサ氏をはじめとする有志（クリスチャン）が立ち上がったのです。被害者と加害者が共生共存する社会作りを目指して人々に呼びかけて活動を展開しました。

『幾千の丘』から眺めるキガリの町並み

虐殺の現場のひとつのニヤマタカトリック教会を訪れる

REACHのスタッフとして働く佐々木和之さん

佐々木さんは、日本国際飢餓対策機構の職員として1988年から2000年までエチオピアで農業指導を通してアフリカの人々の自立支援活動に関わってきました。しかし、植民地から脱皮して独立国家が誕生する過程で多くの国で内戦や難民が続出しました。「平和学」を英国の大学院で修めた佐々木さんは、2005年よりルワンダでのREACHの活動に参与して、「和解・赦し・償い」のプロジェクトに従事しています。①癒しと和解セミナー②被害者側と加害者側家族による協働活動支援③償いのプロジェクト（虐殺加害者による虐殺生存者のための住居建設）④スポーツ・文化活動を通しての青少年平和交流プログラムが主な活動です。

佐々木さん㊧とREACH代表カリサさん㊨

キレへの集落で行われた集団会見は圧巻でした。虐殺生存者のサベリアナさん（女性）と彼女を傷つけ家を破壊し財産を強奪した虐殺加害者のタデオさんたち（男性）が並んでの会見です。彼女の顔には大きな傷跡が痛々しく残っています。加害者たちは同じ集落のツチ族を襲い殺害や傷を負わせました。「償いとして女性の家を作ります」。具体的な被害者に対する償いの働きが進められています。佐々木さんはじめREACHの活動による確実な和解への一歩を実感しました。異国の地で日本人として平和構築に献身する佐々木さんの働きに誇りを覚え拍手を送りました。

和解と癒しの働きを通して見えてくるもの

「加害者たちを赦さず、彼らと和解せずにいるなら、毒を持って人生を歩むようなものです。人を赦すことこそ自分の将来に幸福な生活を築く鍵なのです」（REACH代表カリサ氏の言葉）

「神はキリストを通して私たちをご自身と和解させ、また、和解のために奉仕する任務を私たちにお授けになりました。」
（新約聖書コリント人への第二の手紙５章18節）

（2010年12月14日記）

民族間の和解のプログラムとして行われているルワンダ伝統音楽の演奏風景

世界里親会 活動地のこども

フィリピン・ミンダナオ島
カバンラサン地区

里子支援スタート!!

～200人の子どもたちが里親さんを待っています～

世界里親会では2011年１月からフィリピン・ミンダナオ島・カバンラサン地区で200人の子どもの支援を始めます。

私は2010年11月に現地を訪問しました。支援の対象となっているのはこの地域の中でも最も貧しい生活をしている子どもたちです。

この地域では、道路のほとんどは舗装されておらずガタガタです。雨が多い地域なので、未舗装路向きのバイクでさえも泥沼のような水溜りにタイヤがめり込んでしまったり、転倒したりしてしまいます。訪問期間中私たちが乗った四輪駆動車も、悪路のため３回もパンクしてしまいました。

同地区では働く子をよくみかけました

里子になる予定の子どもたちの家庭を訪問する途中、小さな子どもがとぼとぼとうつむき加減に歩いているのを見ました。その子は痩せていて、服もボロボロでした。私はそのような状況の子どもを目の当たりにしてショックを受けました。カバンラサンの人々を15年にわたって支えてきたコン氏は、「この様な子どもは珍しくはなく、出稼ぎに行っている父親の収入だけでは食べることもままないので、母親も働いている状況です。生きていくためには小さな子どもでさえも、地主の畑仕事をしなければいけない場合があります。」と語りました。訪問した家庭の中にも両親が不在で家族の様子がわからない家庭もありました。

この子どもたちがこのまま通学できずに大人になると、貧困の中で同じ状態が繰り返されることになります。この地域の人々は、この現状から抜け出すことができるという思いすら持つことができないでいるのです。世界里親会は、人々が生活を変えていけるという希望を持ち、その希望がかなえられるお手伝いをする働きです。

世界里親会では、このような200人の子どもたちを支援してくださる里親さんを募集しています。地域の子どもたちは一日一食以下で、なんとか飢えをしのいでいるという現状です。

成長に必要な食べ物が与えられ、子どもたちが将来に希望を持って勉強できるような環境を整えるために、皆様の力を貸して頂けないでしょうか。是非、カバンラサンの子どもたちの里親になってください。よろしくお願い致します。

（報告：世界里親会・向頭）

※前回のニュースレター245号で地区の名前をカランバサンとしましたが正しくはカバンラサンでした。

第20回 芦屋国際児童画展

2010世界食料デー
芦屋大会実行委員会

●テーマ●
「毎日食べているもの」

金賞

芦屋国際児童画展が、兵庫県のJR芦屋・駅前広場地下部（ラボルテ大丸地下通路）で2010年10月８日から17日まで開催されました。

子どもの絵画を通して、開発途上国の人々への理解を深めていただこうと、世界食料デー芦屋大会実行委員会と日本国際飢餓対策機構が主催して、世界食料デーの取り組みの一環として毎年行われているものです。

20回目を迎えた今年は、フィリピン、バングラデシュ、カンボジア、ウガンダ、ボリビアの５ヶ国から計104点の子どもたちの絵が集まりました。

今年のテーマは『毎日食べているもの』です。大阪府立茨木支援学校美術科教諭の奥野泰孝、洋画家の川畑勝美両氏によって16点の受賞作品が選ばれました。

銀賞

国際大賞・金賞
モニシャ（10才）
バングラデシュ（女）

作者コメント：私の家族を描きました。お母さんがケーキを作っています。このケーキは普通、小麦粉、砂糖、ココナッツで作ります。お母さんがケーキを作り、私がお皿の上で飾りをつけています。弟がおいしい食べものができるのを待っています。

講評：色使いがとても面白い。色を混ぜ合わせてわざと少しくすんだような感じを出しているところが素晴らしい。べた塗りの構図がかえって目をひき、家族の様子がとてもよく伝わってくる。構成力もすばらしい。

国際大賞・銀賞
マリソル・フロレス（12才）
ボリビア（女）

作者コメント：日々の食事に感謝をささげます。

講評：テーマ性が素直に伝わってくる。家族の団らんの様子が楽しい。

■児童画貸し出しについて

毎年、テーマに沿った子どもたちの絵が、６～９ヶ国から約100枚大阪事務所に届けられます。開発途上国の子どもたちを取り巻く環境や子どもたちの夢などの国際理解にお役立てください。貸し出しご希望の方は、大阪事務所　吉田まで。

芦屋国際児童画展

1989年、兵庫県芦屋市在住の洋画家を中心とする日本国際飢餓対策機構の支援者の方々が、芦屋市の子どもの絵画を集めて絵画展を行いました。翌年、開発途上国への関心や理解を深めていくために、日本国際飢餓対策機構が活動している国の子どもたちの絵も一緒に展示してはどうか、という提案を受けて『芦屋国際児童画展』が始まりました。以来毎年開催され、参加した開発途上国の子どもたちに絵の具やクレパスなどの画材が贈られています。